

特集にあたって

慶應義塾大学整形外科 中村雅也

超高齢社会を迎えた日本において健康寿命の延伸は喫緊の課題であり，特に運動・感覚麻痺をきたす圧迫性脊髄障害の治療は脊椎外科において最重要テーマの1つといえる．また，圧迫性脊髄障害に対する多くの術式はわが国で開発されてきた歴史がある．これらの背景を踏まえ，本号では現在行われている頸椎椎弓形成術の最新の知見を議論することを目的として企画させていただいた．

まず，頸椎椎弓形成術の多くの術式がわが国で開発されてきたこれまでの歴史に関して，渡辺航太先生に依頼させていただいた．代表的術式として片開き式椎弓形成術，両開き式椎弓形成術の実際と術式におけるさまざまな工夫に関して，慶應義塾大学の名越慈人先生，東京大学の土肥透先生に記載いただいた．東京医療センターの辻崇先生には頸髄症に対する椎弓形成術の除圧範囲に関して，また千葉大学の古矢丈雄先生には椎弓形成術の術後合併症とその対策に関して記載いただいた．

次に，代表的な対象疾患である頸椎症性脊髄症，頸椎後縦靱帯骨化症，頸椎症性神経根症に対する椎弓形成術の治療成績に関して，ツカザキ病院の下川宣幸先生，筑波大学の國府田正雄先生，新潟中央病院の勝見敬一先生に依頼させていただいた．

最後に，前述の代表的な椎弓形成術である片開き式と両開き式椎弓形成術の比較に関して名古屋大学の中島宏彰先生に，椎弓形成術の適応と限界と題して，特に固定術の必要性に関して東京医科歯科大学の吉井俊貴先生に記載いただいた．

以上のように，いずれも第一線で活躍する先生方の力作揃いであり，本特集をご一読いただければ，頸椎椎弓形成術に関する現状と課題，さらに今後の展望がご理解いただけると自負している．是非，脊椎脊髄外科医を志す若い先生方に本誌を手にとっていただき，今後の臨床の一助となれば望外の喜びである．